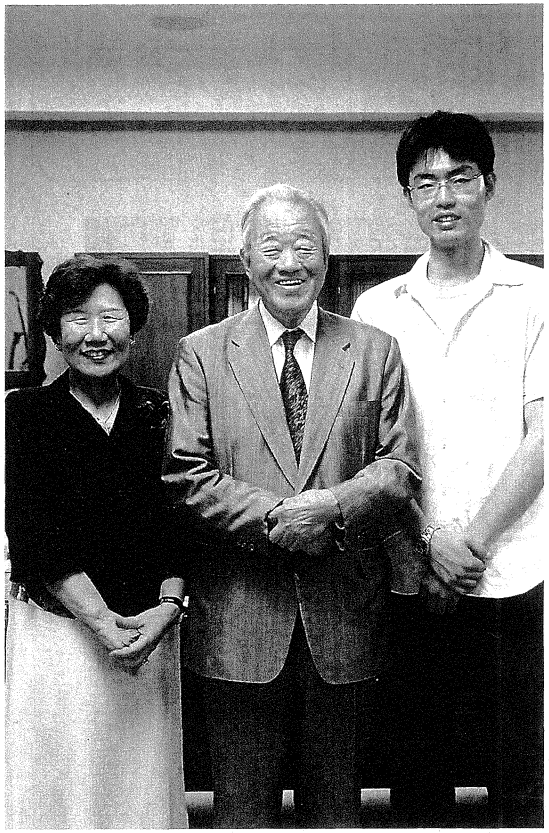
河合隼雄文化庁長官鼎談 第五四回●ゲスト

大久保邦子さん●文化ボランティアコーディネーター
藤田大悟さん●東京工業大学大学院生

文化ボランティアは、やればやるほどおもしろい



文化ボランティアの広がり

河合　私が長官になって「文化ボランティア」を提唱したら、急激に広がって、やる人が増えてきて、いろんな文化ボランティアが出てきて喜んでいます。学生のボランティアも増えましたけれど、藤田さんが文化ボランティアを始めたきっかけはどうだったんですか。

藤田　「文化ボランティア」という名前を知る前から、ボランティア活動はしてたんです。小学校一年でボーイスカウトを始めて、いろいろなところで奉仕活動をして、人のために何かするという興味はあったんです。初めて「ボランティア」というかたちでやったのは、大学へ入ってから日本科学未来館のミュージアムのボランティアで展示解説をやったのがきっかけです。

河合　小さいときから、こういう活動をしてこられたんですね。

藤田　よくわかってなかったのですが、結果的には文化ボランティアをやっていたんです。

河合　そうでしょうね。みんな文化ボランティアをやってたんだけど、それに名前がついたので、よけいはっきりしたんですね。やる人もやりやすくなったというところも実際あって、言ってよかったと思うんです。

大久保　私は、ヌエック（国立女性教育会館）ができたときに、図書館でお手伝いしたいと思ったのがきっかけです。ボランティアは文化であるということを、自分たちでは確信してたんですけど、さすがに「文化ボランティア」という言葉は思いつかなかったです。長官が「文化ボランティア」という言葉を言ってくださったので、私たちとしては非常にありがたかったですね。一挙に視野も広がってきたし、市民権をもらったみたいな感じです。

河合　ほんとにそうです。前からやってる人たちが、自分たちがやってることに名前がついたという感じでね。

大久保　そうそう。名前がついたことで、すごくやりやすくなりました。

文化ボランティア全国フォーラムの苦労

河合　今年三月に開催した「文化ボランティア全国フォーラム2006」もよかったと思うんですけども、全国から二八〇人ぐらい来られましたかね。大久保さんが藤田さんみたいな大学院生を引っ張り込んだんですか。

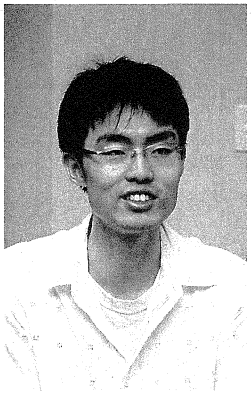
藤田　引っ張り込まれました（笑）。

大久保　優秀な若者二人を引っ張り込んだんです（笑）。

河合　どうでした、誘われたときとか、誘われてからとか。

藤田　官庁のお仕事じゃないですか。正

おおくぼ・くにこ　鹿児島県出身。雑誌社勤務後、地域活動、国立女性教育会館ボランティア（昭和53～平成10年）など。同会館10周年に仲間と「社会教育施設ボランティア交流会」を開催し、その後、文化ボランティアの推進にのめり込む。文部省生涯学習クリエイティブ・アドバイザーなど歴任。編著書『文化ボランティアガイド』（日本標準、2004）など。文化ボランティア全国フォーラム実行委員長。



ふじた・だいご　広島県出身。東京工業大学大学院生命理工学研究科修士課程2年。専門はウイルス構造学。「東工大Science Techno」の初代代表で，学生ボランティアとして日本科学未来館を中心に，実験教室や展示の企画・運営を手がけた。現在は研究のかたわら，（株）リバネスでバイオ系の実験教室などを企画している。ボランティアメッセ2004事務局長，文化ボランティア全国フォーラム実行委員。

●今回は従来の「対談」ではなく「鼎談」を行いましたが、対談シリーズの通し番号を付しています。

直、楽しいのかなと最初に思ったんです。僕は大学院の学生なうえ、いろいろな活動をやっているので時間がなかなかとれないんです。せっかくやるんでしたら、自分に利益というか自分がここで成長できるような空間なのかを見極めないといけないと思って、大久保さんに「どんなことをやるんですか」とけっこうしつこく伺ったんです(笑)。話を聞いてみて、これだったらいっしょにやって自分も成長するし、ほかの人に何かきっかけを与えられるかもしれないと思って協力したんです。

河合　ボランティアというのは、自分も入れてみんなで楽しむ、自分も入れて成長する、そこにすごく意味があるんです。

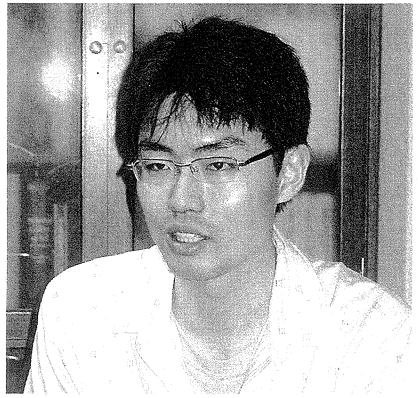
それでも、全国フォーラム開催となると、苦労話があるんじゃないですか。

大久保　苦労といえば苦労ですね。特に、初めての全国フォーラムでしたから。しかも、予算がとてもじゃないけど、少ないわけですよ。それに全国規模のうえに、全国の実行委員全員が顔なじみというわけではないわけです。地域バランスを考えてお願いしたんですけど、まず短い期間ではなかなか会う機会がない。

でも、大学の先生も、学生も、みんなが、ボランティア精神でやっている人ということを第一条件にしたんですね。

河合　いや、わかりますよ。本当に楽しいのは、ちょっとずつ苦しいことが当然入るんでね。

大久保　実行委員全員で意見交換するところまではなんとかこぎつけたいと思っていたそのころから、若手がメーリングリストをパッとつくってくれました。私たちはできませんもの。そのころから、みんなが自発的に手を挙げてやり始めたんです。これはもう目からうろこでしたね。



河合　そのプロセスがすばらしいですね。

大久保　主体性があり、自発的でしたね。

藤田　みんな自分で何かやりたいと思ってやってるんで、やりやすいです。

河合　あなたが言うように、やりたいことをやるときは、人間、できるんですよ。

うまく衝突するとプラスが生まれる

河合　実際どうでした。何か印象に残ってるとか、おもしろいというのでは、どんなんがありましたか。

藤田　僕自身はミュージアム以外のボランティアの人たちとお会いして、行政と戦ってる人もけっこういるんだなと初めて知ったんです。実際に全国の人が集まってみると、なんとか自分たちの意志を貫いて、行政を納得させたりとか、逆にいいかたちで協力関係をもったりとか、そういう面がかなり多いんだなと思いました。

河合　私もそういうことを強調しましたけど、普通の戦いというのは勝ったら勝ちなんですよ。それが戦いじゃなくて、衝突である場合、うまく衝突するとプラスが生まれるんです。どっちが勝つかじゃなくて、新しいものが生まれるんです。これが文化ボランティアのものすごくいいところなんですよ。

あなたが言ってるように、初めはバーンと衝突してるんやけど、最後は協力関係になって、そのときにいちばんけんかしたやつが仲良うなったりしてね(笑)。やっぱり言いたいこと言わないとだめです。そこでけんかにならずに、衝突して、うまいものをつくった人たちは、すごい協力関係ができています。これが日本の新しい動きだと思っていますね。

大久保　実行委員会でも全国フォーラム最後の全体会をどういうふうにするかというので、前の晩、もめましたよね。

藤田　もめましたね。長官を舞台に上げるか下げるかで(笑)。

大久保　そう。当初長官を舞台に上げたほうが絵になるのではと思っていたんですが、地域でやっている人たちからは、長官を上に飾るというと語弊があるんですけど、長官もみんな舞台下で聞いてもらいましょうということがすうっと出てきました。とても新鮮でした。

河合　結果的にうまくいったわけですからね。そういう体制を皆さんがされるというのはすごく大きいと思います。

文化ボランティアの発展のために

河合　「文化ボランティア」に若い人にもっと参加してもらうアイデアってありますか。

藤田　正直、今の学生はやりたいことがたくさんあるし、やれる機会もたくさんあるので、めちゃくちゃ忙しいんです。お手伝いさんとして何人か募集をかけても、学生は集まらないと思うんです。でも、自分の成長の空間になる場だということがわかると、すごく食いつく。自分を高める意味でインターンシップには多くの学生が応募しています。ボランティアをやるとこういうメリットがありますよ、と明確にしていくとインターンシップよ

文化人の本音 河合隼雄文化庁長官鼎談

りも気軽にふっと行けるので、学生たちがもっと集まってきますよ。

河合　みんなにメリットがあるということを、わかってもらうということですね。

藤田　僕自身、未来館のボランティアや、今回のフォーラムも最初はなんとなく楽しそうだから始めました。そしたら、その場で企画をつくる楽しさを学べたし、社会人の方に企画ってこういうふうにつくるんだよって教えてもらったり、お金のやりとりのしかたもちょっと教えてもらったりしました。これらはボランティアをやったから学べたことで、それが今の活動にすごく生かされています。ボランティアというのは、今の自分のスキルアップだけでなく、一生かけてスキルアップできる空間だと思います。

河合　まさに生涯学習と密接に関連することですね。しかし、学生のボランティアはだいぶ増えてきてますけど、もう一押しやるためには、藤田さんが言ってるようなことが、もっとみんなにわかるといいですね。

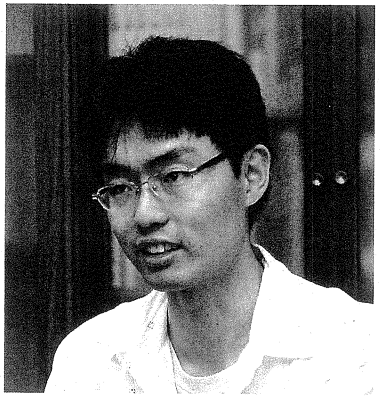
藤田　そういう意味では、コーディネーター的な役割をする人が必要になるんだろうと思います。

河合　日本の社会の問題は、なんにつけても、コーディネーターが今まで評価されなかったですからね。

大久保　本当は地域に世話役がいっぱいいたじゃないですか。お仲人したり、いろんな世話役がいたんですよね。

藤田　いい意味のおせっかいおばさんというか。

河合　それがね、昔はいい意味でないおせっかいもたくさんあった（笑）。世話役というのが、いばりだしたりするんですよ。



大久保　例えばいい意味のコーディネーター像みたいなものをスマートにつくっていくと、みんながそういうものを理解するようになると思います。「それならやってみるよ」という人が出てくるといいなと思うんです。

藤田　新しい仲間ができると、この人もがんばってるから、おれもがんばろうという気持ちになる。

　特にボランティアは、完全にお金のモチベーションじゃなくて、自分の楽しみや自分を高めることがモチベーションなので、特にこういう空間でみんなを高めていかないと耐えられない瞬間があるんですよ。

河合　普通やったらお金が入ってくるから耐えてるんだけど、お金なしで耐えるということは、違う「なにか」があるんです。

大久保　お金なしで耐えたんだということで、そこに満足というか、何かまたもたらされますしね。やればやるほどおもしろいし、生き方そのものといってもいいと思います。

河合　僕は「おだてられたら、殺人以外のことはなんでもおやりになるんじゃないですか」って言われてるんです（笑）。極端な言い方ですが、死ぬまでに三人の人の役に立ったら満足すべきやと思いますね。

藤田　ああ、それぐらいの気持ちは重要ですね。そういうのはあまり考えてもなかったですね（笑）。

河合　お二人ともこれからも文化ボランティアをどんどん進めていってください。どうもありがとうございました。（了）

文化庁の抜穴

舞台芸術特区

河合隼雄

　規制緩和によって、日本中にいろいろな特区ができたのは、周知のとおりである。

　ところで、「舞台芸術特区」があるのをご存じだろうか。教育特区は知っているが……ということになるだろう。実は偉そうに言っている私も、こんな特区のあることを知らなかった。

　それは富山県南砺市利賀村上百瀬地区である、と言うと演劇通の方は「そうか」とうなずかれるだろう。鈴木忠志さんという国際評価の高い演出家が、ここに劇場や研修所を建て、世界の演劇人が集ってくる、というわけである。私は行って舞台を見せていただき感激したのだが、今回強調したいのは次の一点である。

　マスメディアにはいろいろ特区の話題が報道されるが、これは芸術文化に関する全国唯一の特区であるのに、どこにも報道されなかったのが私は残念なのである。マスメディアの方に、どうか芸術文化にも目配りをお願いしたい。